



外務次官として働くソ・ハンさん。

## 外務次官として外交をリード

ソ・ハンさんはJDS第1期生として来日し、新潟県の国際大学大学院で2年間経営学を学んだ。日本には大都市だけでなく地域にも先進的で充実した大学施設があることにたいへん驚き、また人々と交流しながら地域の生活と日本文化も学ぶことができたという。「私は雪が好きなのでスキーに挑戦し、また新潟の名産の一つでもある日本酒も楽しみましたね」と、新潟での暮らしを懐かしそうにふり返った。ミャンマーのJDSの対象人数が対象国の中でも最大級であることや、学費はもちろんのこと日本での生活費の援助を奨学生が受けられることなど、ソ・ハンさんはさまざまな支援に感謝している。「ミャンマーの課題解決につながる学科を選択できることも素晴らしいですし、修士課程を修了した後、申請資格があれば博士課程で学ぶことも可能です。留学中に日本人学生と他の国からの留学生とのネットワークを築けたことが

左：留学時代に日本で出会った仲間たちは、現在各国で活躍中だ。右：2004年の国際大学大学院修了時、指導教授とともに。



Myanmar  
ミャンマー  
ソ・ハンさん

ミャンマー出身。JDS第1期生として、2002年から04年まで新潟県南魚沼市の国際大学大学院にて経営学を専攻し、MBA（経営学修士）を取得する。19年にミャンマーの外務省事務次官に就任。ミャンマーではJDS卒業生初の外務事務次官となる。

一番の財産で、それは今日にも生かされています」と話す。

ソ・ハンさんは2019年にミャンマーの外務省次官に就任し、就任以来いそがしい日々を送っている。20年2月にミャンマーの首都ネーピドーで開催された「第7回日・ミャンマー人権対話」ではミャンマー側代表を務めたり、また今年に入ってから、オンラインで開催された新型コロナウイルス感染症に関する国際会議に出席してミャンマーにおける予防策や終息に向けた対策などを報告したりと活躍している。「外務省の高官として、国際舞台でミャンマーの外交政策を実行し、視野を広くして、ミャンマーの国益に沿うよう努めていきたい」と抱負を力強く語る。なお、ミャンマーでは19年12月にJDS卒業生から女性の法務長官府事務次官も誕生した。



## リーダーとして観光開発を推進

2005年に愛知県で開催された愛・地球博のタジキスタンパビリオン広報担当として初めて来日したアモンゾダ・シリさんは日本のことをたいへん気に入って、このときから日本で教育を受けることを目標にしていたという。夢がかなって、14年から16年まで立命館アジア太平洋大学大学院で、世界中から集まった若きリーダーたちとともに、公共政策の分野に関する過去から現代までの理論と実践の双方を学ぶことができた。「JDSはタジキスタンで働く女性公務員にとって、日本で勉強と生活を両立させることができる貴重なプログラムだと思っています」とアモンゾダさんは話す。留学中は、娘二人とともに

タジキスタンの大学で講義を行った。



大分県別府市に滞在。また、同地で中東や中央アジア諸国の新年を祝う祭りを企画し、タジキスタンの文化や伝統、ライフスタイルを地域に積極的に伝えてくれた別府市役所の方々にはとても感謝しています。日本滞在中に母国の両親を相次いで亡くしてつらい時間を過ごしたが、周囲の励ましで乗り越えることができたという。

タジキスタンに帰国後、設立されたばかりの観光開発委員会の副委員長に任命され、他の省庁とも協力しながら30年までの観光開発戦略と、これを実行するための行動計画などを作成した。さらに20年には、同委員会の委員長に任命されたという。「私は日本で、公的な観光計画と政策、および政府の役割について研究しました。帰国後に観光開発の重要な地位に任命されたとき、日本での研究結果がとても役立ちました。それはこれからも将来の助けになると考えています」とアモンゾダさんは留学の意義を語る。タジキスタンの観光産業の発展のため、これからも努力を続けるつもりだ。



委員長としていそがしい日々を送っている。



学びが羽ばたく

# 日本と世界をつなぐ留学生

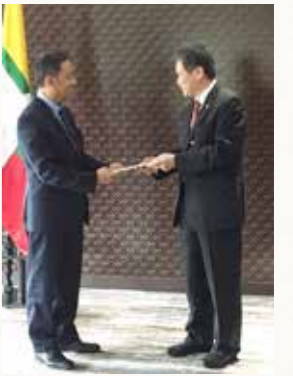
JICAと大学の連携により学びを深めた、途上国出身の留学生たち。現在は、母国や日本で生き生きと活躍している。

文●久保田 真理 (p.06~07)

ミャンマー出身のアウン・ミョー・ミンさんは2003年から05年までの2年間、筑波大学大学院で日本とASEAN（東南アジア諸国連合）諸国との関係について研究した。「筑波大学は、国の多くの研究機関を擁する筑波学園都市の中心に位置し、世界中から留学生が集まっています。学生生活はとても刺激的で、よき思い出です。ASEANと地域主義に関する研究を通じて得た知識や経験が、現在の仕事にたいへん役立っています」とアウン・ミョー・ミンさんは語る。的確な指導や助言をくれた教授陣や、自身の論文に必要な資料を探すのを手伝ってくれた図書館スタッフ、また、ASEAN諸国の留学生と日本人学生との間に強い絆ができた学生生活にとても感謝しているという。「知識や教訓といった確かな知の基盤を大学で身につけ、JDS留学生として、社会をよりよくするために責任感と人間性を

育むことができました」と、留学の意義をあらためて確認した。

20年にアウン・ミョー・ミンさんはASEAN常駐代表に就任し、ASEAN首脳会議などでの決定事項の推進、共同体内の横断事項の調整、対話国との関係強化、ASEAN事務局に対する行政上および実務上の支援などの任務についている。さらに、ASEAN後発加盟国であるカンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナムに対する開発格差の是正などの支援を通じてさらなる地域統合を促進する「ASEAN統合イニシアティブ」の議長を務めたり、新型コロナウイルス感染症に関するさまざまな国際会議に参加したりと、めまぐるしく変化する国際情勢に対応する日々を送っている。「この感染症による社会経済への悪影響に対して、ASEAN全体で取り組みを強化することに全力を注ぎます」と誓う。



ASEAN事務総長より常駐代表の信任状を受け取った。

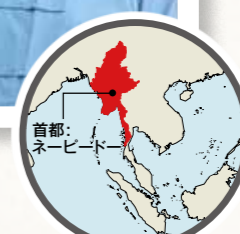
## アウン・ミョー・ミンさん

ミャンマー出身。JDS第2期生として、2003年から05年まで茨城県つくば市の筑波大学大学院の国際地域研究専攻にて日本とASEAN諸国との関係について研究し、南アジア・東南アジア研究の修士号を取得する。20年にミャンマーのASEAN常駐代表に就任。



## 常駐代表として ASEANの役割を強化

国際会議にASEAN常駐代表として出席するアウン・ミョー・ミンさん。



Myanmar  
ミャンマー



刺激的な2年間を過ごした筑波大学大学院での修了式にて。



別府市内で暮らしていたアモンゾダさんと彼女の子供たちは地域にも溶け込んだ。



Tajikistan  
タジキスタン

## アモンゾダ・シリさん

タジキスタン出身。2014年から16年までJDS留学生として大分県別府市に暮らし、立命館アジア太平洋大学大学院にてタジキスタンの観光開発と公共政策計画について研究する。17年に同国の観光開発委員会の副委員長に任命され、20年に委員長（同国では閣僚級）となる。



## JDSとは

将来出身国の政策立案者となることが期待されている優秀な若手行政官を日本の大学院に招く人材育成計画(The Project for Human Resource Development Scholarship、通称はJDS)のこと。1999年から無償資金協力事業として開始された。相手国のニーズを重視し、途上国の重点分野や開発課題と関連のある分野で学びを提供。2019年度には16か国360人の留学生を受け入れ、これまでに修士課程と博士課程を合わせて4,600人以上の留学生が来日した。





Uganda  
ウガンダ

## 日本で得たスキルを 母国の衛生向上に生かす

新型コロナウイルス感染症の拡大で手洗いによる予防効果が目に見えているが、ウガンダでは手洗いの習慣はまだ根づいていないという。そうしたなか、日本企業サラヤの現地法人は、手指消毒剤の生産・販売を行うとともに、医療従事者への教育や学校・幼稚園への啓発活動を行っており、ロビーナさんは現地法人の創業初期からそうした活動を支えてきた。そして2016年、さらなるスキルアップのためABEイニシアティブに参加した。

「日本にきた一番の動機は、ウガンダのサラヤに公衆衛生のエキスパートが少なかったことです。長崎大学では保健医療についてさまざまなことを学ぶことができました。たとえば、フィリピンを訪れて現地の保健システムがどのように機能しているかについて学び、日本の協力がそこにどう貢献しているかについて理解しました。また感染制御管理の世界保健機関(WHO)協力センターであるジュネーブ大学病院にも滞在し、約3か月間、感染管理について多くのことを学びました」とロビーナさんは話す。

プログラムを通じて高めた専門性は、現在の仕事

## ロビーナ・アジヨクさん

サラヤ・マニュファクチャリング・ウガンダ チーフ衛生インストラクター  
ウガンダ出身。大学卒業後、日本企業サラヤの現地法人に入社。2016年来日し、長崎大学で公衆衛生学を学ぶ。サラヤ本社でのインターンシップを経て、現在は衛生のエキスパートとして活躍する。



に大いに生かされている。ウガンダに帰国後、医療施設の衛生状況を改善するための政策を政府機関に提案した際には、「日本で得た研究スキルのおかげでジュネーブの研究チームと連携することができ、データに基づいた解決策を示すことができた」という。

目下の急務は手の衛生について特に重視される新型コロナ対策だ。ウガンダでは手指消毒剤を製造している企業が2社しかない。ロビーナさんは「ウガンダだけでなく東アフリカ地域の顧客との関係があり、新型コロナとの闘いに向けてかかる期待は大きいです。また、学校、銀行、オフィスなどの公共の場所に手指消毒剤ディスペンサーを設置する際の専門的なアドバイスも提供しています」と、現在までの取り組みを説明する。

今後は、農村部のコミュニティにも衛生の重要性を広める活動をしていきたいと話すロビーナさん。JICAとの将来的な協業にも期待しており「アフリカと日本の架け橋であり続けたい」と語ってくれた。



上：日本のサラヤ本社でインターンシップも経験した。「日本人はすべてのことにおいて効率を考えていることに気づいた」と話す。  
下：フィリピンでのフィールドワークの様子。

## ABEイニシアティブとは

アフリカの若者を日本に招き、日本の大学での修士号取得と、日本企業でのインターン実施の機会を提供するプログラム。アフリカの産業人材育成と、日本企業のアフリカビジネスを現地でサポートする水先案内人の育成を目的としている。2014年の開始から5年間で、54か国1,200人以上のアフリカの若者が来日した。



衛生環境の改善は製品の提供のみで進むものではなく、その必要性、有用性を納得したうえで的確に使用していただく行動変容が必須です。その意味で、専門的なアドバイスができるロビーナの役割は、新型コロナ後にもさらに重要になってくると思います。

サラヤ・マニュファクチャリング・ウガンダ 社長  
北條健生(ほうじょう・たけお)さん

## COLUMN

### 日本で学んだ“復興”の経験をふまえ 西日本豪雨被害に義援金

2018年7月に発生して、広い範囲に多くの被害を与えた西日本豪雨。モンゴルJDS帰国生のムングスフさんはそのニュースにいち早く反応し、同じ帰国生に呼びかけて寄附を集め、翌8月に義援金を被災地に贈った。  
ムングスフさんは15年来日して明治大学で公共政策を学んでいた。在学中、東日本大震災の被災地を見て回った経験があるという。ムングスフさんは支援に至った経緯を次のように話す。  
「宮城県岩沼市を訪れ、仮設住宅や食糧の保管場所などを見学し、市民の方々にお会いしました。災害後の状況下でも一生懸命、効率的に活動している自治体や市民の方々の姿には本当に感銘を受けました。帰国した翌年



上：ベトナム人労働者にインタビューするグエンさん(左)。  
左：兵庫県姫路市の仏教系寺院にて。2017年のインターンシップではベトナム移民のコミュニティを訪れ、兵庫県の支援策などについて学んだ。

## 調和のとれた 2国間関係に貢献したい

英語の教師を辞めた後、日越大学の1期生として学び、現在、神戸大学の博士課程に在籍しているグエン・ティ・フエン・チャンさん。彼女は高い志を持ってこれまでの道を歩んできた。

「大学で学んだ英語を教える仕事に就くことができたのは幸運でしたが、それは専門分野のなかに自分を追い込むことにもなりました。世界的な問題の解決に取り組むため、より広い視野を持つ必要性も感じていました。新たな道を模索していたなかで出会ったのが、日越大学でした」とグエンさんはふり返る。

設立間もない大学の最初の入学者になることには不安がありそうだが、グエンさんは「入学を決心するのは簡単だった」と話す。「日越大学は複数の学問領域にまたがるアプローチで持続可能な発展を目指すというビジョンを強調していました。日本の質の高い高等教育をベトナムにもたらし、持続可能な開発の専門家の指導が受けられ、さらにJICAの全面的な支援を受けられるという学習環境は、まさに私が探していたものでした」。

日越大学での専攻は、これまで学んだことのないベトナム地域研究。新たな分野への挑戦には苦労もあったが、日本人やベトナム人の教員のサポートで意欲的に臨むことができ、多くの学びを得たと話す。特に教員の忍耐力と柔軟性に感銘を受けたという。「この学びで、私は日本とベトナム両方の価値観を体感しました。日本人教員の膨大な努力と、それを支える学問への情熱、そしてベトナム人教員の持つ柔軟な問題へのアプローチは“右

手”と“左手”のようなもので、私は今でも日々、その両手を上手に使えるようになりたいと思っています」とグエンさん。当時の恩師とは今でも連絡を取っているという。

卒業後は、日本の文部科学省の奨学金を受けて神戸大学の博士課程に進んだ。現在の研究分野は、日本でのベトナム人労働者の保護と支援だ。さまざまな課題のある今日的なテーマだが、グエンさんは「日本の労働者受け入れに関わる政策や、日本人雇用主とベトナム人労働者の関係の改善に少しでも貢献したい」という思いで勉学に励んでいる。「両国間の調和のとれた豊かな協力と相互理解がますます進むことで、より持続可能な発展を遂げることができると信じています」と、グエンさんは将来に期待を寄せている。

## グエン・ティ・フエン・チャンさん

神戸大学 文部科学省博士課程奨学生

ベトナム出身。大学で英語を学んだ後、2016年に日越大学修士課程に入学。ベトナム地域研究を専攻する。18年に文部科学省の奨学金を受けて来日し、現在は神戸大学で国際労働移民について研究している。



Viet Nam  
ベトナム

## 日越大学とは

日越共同声明に基づき、2016年9月に開学した日本とベトナムの友好の象徴となる国際水準の大学。現在、修士課程8プログラムを開講。JICAは、16年より技術協力にて、日本の7大学とともに修士課程の設立・運営、大学の組織体制の整備支援を実施し、日本人の教員派遣や日本でのインターンシップ等を提供している。



2018年8月17日、JDS帰国生のムングスフさん(左)と、同じく帰国生のオウンさんがJICAモンゴル事務所を訪れ、義援金振り込みを報告した。

に豪雨被害が起り、すぐに帰国生と話し合って寄附を呼びかけました。これまで支援を受けた日本へ、せめてもの恩返しをしようと思ったのです。JDSはモンゴルの若手公務員の能力や精神面の成長につながる重要な支援です。素晴らしい機会を与えてくれた日本の皆さんに感謝しています」